

我が影：短歌

著者	向日葵
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 7
ページ	7 1 - 7 3
発行年	1918-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6809

春の惱み

二、二、甲二 白

若葉燃えつきぬ思の去り來りもの狂ほしやこのごろのわれ
うつろなる胸かひ抱き今日も暮れぬわれは來る日をいかに過さむ
ともすればわりなき思胸にあふれ去にし春をし追へる姿よ
ひと頃は常世の幸のわれにありと顛へ泣きてしわが心はも
春十九このわれゆゑに世を捨てし人をも恨み怒りけるわれ
君ゆかばなごありなむと云ひし身に早や二とせの春は來しかな
そこはかとかたみの名なごかきつけて薫る青葉に咽ぶわれかも
雨よ降れ風も疾く吹け創に喘ぐわれに櫻の春あらめやも
わが心君ゆゑ生きしわが心見よ狂亂のこのわが姿
狂亂の焰の中の一脈の冷きものがわれの心か
身も魂も歌に酔はむとひたあがくうつろの胸よ甲斐なきものを

我が影

二、二、丙 向

日

葵

ま淋しきことは多けど自らを知るにまされる淋しさはなし

いたましや悔恨症のさいなみに死なばやどこぞ吐く吾が癪
天が下これや愚なる男の子ぞと叫びても見つ曇り日の野べ
思ひ出は悲しいたまし青鬼の鐵棒をもてわれをさいなむ
悲しきは記憶のきづなもがけどもきぞは歸らずかつ消えなくに
思ひ出のひとつゝに狂はし胸かきみだし枯野を行く
かくもわれ何をか悔ゆると思ひみぬ枯野の原の月の下びに
もくねんと月を仰げば枯野原ひた静もりて瀬の音かそか
狂ほしきわが日頃かな寒月の光り冷く身にしみとほる
逝きし日の繰り言を追ひものみなに己を悔ゆるおろか者われ
強者たらむ惡魔も戀しものみなにひるまぬ心ぞわが願ひなる
生きんかな強くをゝしく神しろす天が下びの輝きのなか
はと遠くも歩みにけらしわが足もけたるくなりぬ春の野原に
偵察に熱せし頬をひいやりと杉の葉露ぞしづくしにける(演習)
春の陽のうら暖かさ晝食をすわが身しみらにしみ渡るなり
のつそりと二匹の馬の歸り來て厩に入りぬ春のひるすぎ(農家にて)
敷きなべし土間の庭に晝食をす百姓家もかげろひて見ゆ
生と死の境も知らずあはれ子は飾りの旗をめづるなりけり(病院にて)

あはれ子の低き呻きのとだねをせめて慰み父はみどるか
蓮華草見れば悲しもありし日の汝の姿の忘られがてに（死見を串ひて）
草を青みもてふ原のたゝなかに大の字になれば春の日はよし
うつし世のなりはひ求めたゝひとり満洲路へて旅立と友は

花と月

一二、甲一 佐 薙 武 男

萎れし水仙今一度かぎて捨てたり
雨に落ちし一つ椿にしづくす椿
花の目を働き暮れし人らの夕餉
風に毀れしタンボボが風の行衛
蝶の羽かすかにもがき蟻ら専念
流るゝ灯遙けしや月のまなかに
ふるさと戀し月の輪の夜を妹よ
御手玉の夕空あかく煙ひとすぢ
闇の底よりの瀬の音みんな眠る
影持ちて明くる瀬の音まばゆく